



東京多摩プロバスニュース

第 32 号

■事務局: 〒206-0034 東京都多摩市鶴牧 5-29-10 平田方 ■編集・発行: 編集委員会 2010. 9. 1.

■電話・FAX (042) 338-7022 ■URL: <http://www.tokyo-tama-probusclub.com>

知恵と経験を生かし、地域社会に発信しよう

第 7 期 定期総会、第 73 回 定例会

日 時 : 平成 22 年 7 月 7 日(水)午後 1 時 30 分より

場 所 : 関戸公民館第2学習室

出席者 : 32 名(会員数 36 名)

第 74 回 定例会

日 時 : 平成 22 年 8 月 4 日(水)午後 1 時 30 分より

場 所 : 関戸公民館第2学習室

出席者 : 29 名(会員数 36 名)

◇◇◇ ごあいさつ ◇◇◇

理 念

1. 豊かな人生経験を
生かし地域社会に
奉仕する
2. 活力ある高齢社会を
創造する
3. 会員同士の交流と意欲
の向上をはかる
4. 非政治的、非宗教的、
非営利的であることと
する

「多彩なプロバスライフを」から「知恵と経験を生かし、地域社会に発信しよう」

会長 鴻池敬和



今までの会長各位をはじめ多くのプロビアンに諸々教えられてきていまだ未熟な身であります、この7月の定期総会で会長に選出されました。

設立以来 7 年目となる今年度のわがプロバスクラブの課題としては、まず、9 月に開催する「多摩プロバスクラブフェア 2010」を成功させることです。このフェアは当クラブにとっても初めての試みで、会員自身の活動を精一杯開陳することを通じて、わがプロバスクラブの活動内容を広く認知してもらおうとするものです。そのために会員全員で大いに努力することが今年度のスローガン「知恵と経験を生かし、地域社会に発信しよう」に沿うことになると思います。

「プロバスクラブを活性化するためにどのようなことをすればよいのか?」「おのずと人が集まって来るようなクラブにするにはどのようなことをすればよいのか?」は内外のプロバスクラブが抱える共通のテーマであり、全日本プロバス協議会からも最近「アンケート」としてこの質問が寄せられてきていますが、わが「多摩プロバスクラブフェア 2010」の企画と準備はこれに対する一つの回答であります。

また、前任の村上会長の提唱によりスタートした「環境問題プロジェクト」は、いま

や地球的規模の課題である二酸化炭素の排出削減について、当クラブとして具体的にどのように取り組んでいくか引き続き追求していきたいと考えます。

わがクラブではすでに、各委員会や各サークルのさまざまな活動を中心に、第 31 号にまで達した東京多摩プロバスニュースの発行を通じて地域社会に発信しております。これらは引き続き活動を継続してまいります。

さあ、皆さん生涯現役で、多彩なプロバスライフを楽しみつつ、大いに地域社会に発信していこう!



第 7 期の理事に就任した皆さん

左から、滝川地域奉仕委員長、関根研修・親睦委員長、西村総務委員長、堀内会計、神谷幹事、鴻池会長、大澤副会長、平田広報委員長、稲田副幹事



第7期定期総会（平成22年度）が7月7日（水）午後1時30分～3時、関戸公民館第2学習室で開催された。議事録にのっとり、以下要約して報告する。

村上伸茲会長の開会挨拶後、登坂征一郎幹事の司会で議長に山田正司会員、書記に北村克彦会員を選出、議事録署名人に村上会長、山田議長、池田寛会員が選任された。

次いで、山田議長が会則11条3項により総会成立を確認し（議決権所有会員36名、出席32名、委任状2名）、議長の議事進行により熱心な審議がなされ、第1号議案から6号議案まですべて承認された。また、報告事項として『理念』の改定について平成22年5月12日の臨時総会で承認され、運用に入っている旨登坂幹事より報告された。

第1号議案 平成21年度活動報告 登坂征一郎幹事

1. 第6期総括報告

「豊かな経験を生かし、多彩なプロバスライフを！」をスローガンとして、地域と共に持続的発展のため、多彩な高齢社会を構築することを基本目標とし、地域関連として「環境問題」、多彩なプロバスライフの構築を目指した「オープンプロバス」の2プロジェクトを発足して次期につなげる活動を、また、地域の歴史に関する見学研修や高齢者の暮らしなどの講話・卓話を通して会員相互の交流や地域貢献に向けて活動を展開した。

2. 各委員会報告

1) 総務委員会

中村昭夫委員長

- ①会員状況；北村克彦氏の入会、片山満子会員の退会で、会員数は36名となった。
- ②定例会；12回開催。理事会、各委員会報告やサークル活動報告、卓話および外部者による「世界の高齢者の暮らし方」、多摩市在住の外国婦人の「多摩ニュータウンの住み心地」などの講話、「環境問題」の自由討論などを行った。
- ③他団体との連携の模索；多摩市内の各種団体との連携、会員が所属する団体との連携・参加協力。WC I（ワールドキャンパス多摩）の後援の実施。
- ④プロバスクラブ理念の改定を提案し承認された。
- ⑤パンフレットの作成。

2) 研修・親睦委員会

増山敏夫委員長

地域の歴史探訪、環境問題等に関連する施設見学などを通し、会員の自己研鑽と相互理解を深めた。（見学会、新年会、納涼会、一泊研修旅行等10回実施）

3) 地域奉仕委員会

神谷真一委員長

- ①裁判員制度セミナーの開催
- ②寺子屋活動の一環として会員の特技等を小中学校長会に説明実施
- ③プロバス寺子屋活動（学校教育支援）

ア.「国際理解授業」11月20日 南豊ヶ丘小学校

出張講師（中村昭夫・関根正敏両会員）「アメリカ合衆国とドイツについて」

イ.「そろばん教室」出張講座（古澤靖雄会員）

多摩第2、瓜生、南豊ヶ丘、東寺方小学校

④「オープンプロバス・プロジェクト」の編成と推進



後列左から幹事報告をする登坂幹事・鴻池会長エレクト
・村上会長、前列左から山田（正）議長・北村書記

4) 広報委員会

滝川益男委員長

会報「東京多摩プロバスニュース」掲載記事の充実を図り、多くの会員に執筆を依頼し、親しまれる会報に努めた。ホームページの更新に外部専門家の起用と定期的更新（3回）を実施。また、URLの改定でアクセスしやすくした。

第2号議案 平成21年度会計決算書・備品目録

堀内陽二会計理事・登坂征一郎幹事

第3号議案 平成21年度監査報告 岡野一馬監査

第4号議案 平成22年度 理事選出

会長	鴻池 敬和
副会長（会長エレクト）	大澤 亘
幹事	神谷 真一
会計	堀内 陽二
総務委員会委員長	西村 政晃
研修・親睦委員会委員長	関根 正敏
地域奉仕委員会委員長	滝川 道子
広報委員会委員長	平田 哲郎
監査（業務監査・会計監査）	村上 伸茲
（副幹事）	稲田 興
（事務局）	平田 哲郎

注記；副幹事は幹事業務補佐および幹事不在時の代行をする。

第5号議案 平成22年度活動計画 鴻池敬和会長

<スローガン>

「知恵と経験を生かし、地域社会に発信しよう」

1. 基本目標と活動方針

1) 基本目標

◇◇◇第7期定期総会(続き)◇◇◇

「東京多摩プロバスクラブ」および地域社会の持続的発展のため、あらゆる人々と互いに協働し、手を携えて、多様な高齢社会モデルを構築することを目指す。

2) 活動方針

- ①オープンプロバスによって、目標と活動状況を地域社会に発信する。
- ②卓話、市民講座、学校などで、諸技術・礼節などを講義により披露する。
- ③地域奉仕委員会、広報委員会などで地域社会に貢献する。
- ④総務委員会、研修・親睦委員会では会員相互の和と絆を深め、多摩を学び次世代に継げる活動を行う。

2. 委員会活動計画

1) 総務委員会

西村政晃委員長

〔副委員長：北村、委員：中村・池田・熊本・鈴木・三木・山田(正)・吉岡〕

運営に関する庶務的・調整的事項を担当し、併せて組織の潤滑油的な役割を果たし、各委員会の相互連携を図る。

- ①定例会の開催
- ②卓話・講話・座談会の充実
- ③他団体との連携の推進
- ④クラブ運営の改善・充実

2) 研修・親睦委員会

関根正敏委員長

〔副委員長：増山、委員：岡野・小西・滝川(益)・永

井・永島・長嶋・阪東・古澤〕

研修・親睦委員会は、会員の自己研鑽と相互理解を深めることを目的に、次の活動計画を推進する。

- ①研修計画；地元・地域の理解、ウォーキング(多摩市および近郊の歴史探訪等)、環境関連施設見学(環境問題プロジェクトと連携)
- ②親睦計画(季節の親睦会、研修を兼ねた一泊旅行)

3) 地域奉仕委員会

滝川道子委員長

〔副委員長：蓮池(守)、委員：上田・大熊・蓮池(光)・堀内・松永・山田(喜)〕

- ①9月の「オープンプロバス」開催に注力

注記；「オープンプロバス」は「多摩プロバスクラブフェア2010」と改称。

- ②学校分野での奉仕活動の展開

4) 広報委員会

平田哲郎委員長

〔副委員長：登坂、委員：稲田、神谷、楠、永田〕

東京多摩プロバスクラブの理念に基づき、会報の発行、ホームページの編集・管理をはじめとし、広報宣伝の諸活動にあたり、対外的認知度を高める。

- ①「東京多摩プロバスニュース」の編集・発行・配布
- ②ホームページの編集と管理
- ③地域メディアの活用と協働
- ④全日本プロバス協議会との連携

第6号議案 平成22年度会計予算(案)

堀内陽二会計

◇◇◇多摩プロバスクラブフェア2010◇◇◇

“多摩プロバスクラブフェア2010”を下記の通り開催します！

期間：平成22年9月22日(火)～27日(月)

10時～17時 但し27日は正午まで

場所：関戸公民館7階市民ギャラリー

展示など：

- プロバスクラブの活動紹介(パネル展示やDVD)
- 会員の自信作の展示(絵画・俳句・写真など)
- 会員のお宝展示(大事な品や思い出の品、珍しい一品など)
- 御茶席(26日(日)11時～12時、14時～15時)

特別イベント

9/25(土) 関戸公民館8階大会議室

★10:30～12:00 子ども広場

「紙(牛乳パック)工作遊び」、「貝合せ遊び」

★13:30～14:30 「江戸くさ講演会」

講師 滝川道子正会員

★15:00～16:00 「落語」

真打ち 三笑亭可龍師匠

★16:30～18:00 「軽音楽の夕べ」

大正琴演奏・男声カルテット他

1. 幹事報告

神谷真一幹事

1) 関係先への新任挨拶

- ・7月13日(火)東京多摩ロータリークラブ
- ・7月26日(月)多摩市役所訪問

ロータリークラブ訪問時、俳句大会の支援要請を請けた。

2) 鎌倉及び八王子プロバスクラブより、役員改選の案内状をいただいた。夫々の各新会長は、鎌倉は野村氏、八王子は杉山氏。

3) ワールドキャンパスの後援として、8月5日関戸公民館で開催される「ありがとうイベント」に、多数の参加を！

2. 委員会報告・活動計画

2.1 総務委員会

西村政晃委員長

1) 7月定例会(7月7日) 出席:30名 欠席:6名

本年度の重要なイベントである「オープンプロバス」の計画について、蓮池守一実行委員長から説明があり、活発な質疑応答を行った。

2) 8月定例会(8月4日) 出席:29名 欠席:7名

当初「終戦記念日に思うあの戦争(その2)」と題して卓話と座談会を予定していたが、時間の都合上、同タイトルで兵役の経験のある永島仁会員と平田哲郎会員の卓話だけとし、座談会は中止とした。

2.2 研修・親睦委員会

関根正敏委員長

7月7日の総会・定例会の後、総務委員会と共催にて京王クラブにおいて懇親会を開催。会員31名の他、先の定例会で多摩市国際交流センター(TIC)から講話・座談会に参加いただいた6名のゲスト(横島夫妻、北脇ジャネット、杉本スー、新里ジュディ、竹内佳代子の皆さん)をお招きし、計37名の参加を得た。



懇親会に集いし面々

鴻池新会長の挨拶ならびに大澤新副会長の乾杯の発声の後グラス片手に歓談、中盤にはカラオケの余興もあり、夏の夕刻楽しいひと時を過ごした。

2.3 地域奉仕委員会

滝川道子委員長

平成22年度の活動が始まりました。まず21年度から引き続き、全員参加のオープンプロバス開催成功に向け、全力傾注で準備を進めております。

地域奉仕委員会独自としては、10月定例会の講話の時間をいただき、山田喜一会員のご尽力で、会員のための「認知症講習会」を開催することになりました。市関係の専門の方をお招きし“認知症の方との付き合い方”等を学びます。この講習を受けると、オレンジの腕輪が贈呈され、私達が講習を受けたことが認知されます。

「天高く馬肥ゆる秋」「江戸しぐさ」では「お心肥し」といいます。心を肥やしてまいりましょう。

2.4 広報委員会

平田哲郎委員長

1) プロバスニュース

滝川前委員長が組織化された編集作業の分担制を引き継ぐこととし、第32号の編集準備に入りました。特に当会会員の豊富な経験、見識に裏打ちされた投稿を積極的に求めるよう努力しております。今後、皆さんの一層のご協力をお願いする次第です、

2) ホームページ

永田委員のご努力でホームページの整備が進み、7月20日で更新公開作業が終了しました。

3. 環境問題プロジェクト

稲田興リーダー

会員個々の炭酸ガス排出量調査を継続し7月(夏)実績把握のため例会時に調査表を配布。この調査を機に、会員自らが実生活の中で排出削減努力を進めて行く。併せて当クラブが環境問題に何らかの形で取組みたいとして、多方面からテーマを集め選定作業を進めている。

◇◇◇ 卓話(戦争体験談) ◇◇◇

兵役の経験のある永島仁会員と平田哲郎会員に、ご苦労の多かった、貴重な体験を卓話の形で紹介していただいた。

「私の戦争体験」

永島仁会員



永島仁会員

私の戦争体験は北支派遣軍独立歩兵第111大隊に入隊する時から始まる。暮れも押し迫った12月下旬、東京駅集合を命じられた我々32名の一行は貨車に乗せられて博多へ、そして夜陰の中乗船し、行き先も告げられず出航。夜が明けて入港したのは釜山だった。

ここから列車で天津、斉南を経て東太平で下車、徒歩で新泰へ向かう。早速敵の標的となり攻撃を受ける。引率の下

士官は敵の歓迎合図だと言って平然としていたが、我々は実弾射撃を受けるのは初めてのことで、ただただ驚き度肝を抜かれてしまった。幸い負傷者も無く宿営地に着いた。が、その晩再び夜襲を受け、治安の悪さに不安を覚える。

新兵教育は厳しく、特に内務班での古年兵の暴行は激しく、言語に絶するものがあった。

ようやく一期の検閲を終え、徳県を経て石門の教育隊へ。教育隊終了後、青島へ。東支那海に面した嶗山で米軍の上陸に備えて陣地の構築中に終戦を知った。

青島へ出て復員業務に従事、奥地からの引揚者の悲惨な姿に唖然とする。理想と現実の違いはあまりにも懸け離れたもので、植民地からの民族解放、四海平等、大東亜共栄圏の理想は？ 米国の原子爆弾による大量殺人、ソ連の抑留等々戦争の惨劇は計り知れない。

◇◇◇ 卓話(戦争体験談) 続き ◇◇◇

「8月15日 一兵士の思い」

平田哲郎会員

私の軍隊生活は、日本陸軍という巨大な組織の最低辺に置かれ、終始、“初年兵”という蔑称で虫ケラのように扱われた文字通り“忍従”の18ヶ月でありました。昭和19年12月、徴兵で広島に入隊しましたが、原隊は中支のもっとも奥地にある“宜昌”であると聞かされ、これでは到底生還は望めないと覚悟しました。



平田哲郎会員

昭和20年初頭原隊追及に出発し幾多の苦難の末南京に到着しましたが、頼みの船舶による揚子江遡行が浮流機雷のため不可能となり、やむなく揚子江沿岸の数百キロを徒步行軍で移動することになりました。しかし、折からの寒気、劣悪な装備、宿泊施設の不備、悪疫の流行等悪条件続出で原隊追及が困難となり転属を命ぜられました。

他部隊への転属で待ち受けていたのが、歴戦の古年兵による容赦のない内務班教育でありました。そもそも、陸軍の内務班教育なるものは、未教育の民間人の人間性、知性を徹底的に削ぎ落とし、軍隊という組織の中の一つの歯車に仕立て上げるのが目的であり、その教育方法たるや軍隊

特有の理不尽極まりない問答無用の鉄拳制裁、個人の尊厳など完全無視の罵倒やいじめの二十四時間教育でありました。そんな過酷な環境を息をひそめて過ごすうちに8月15日の終戦を迎え、一瞬ホッとする間もなく、再度転属を命ぜられました。

この転属した部隊の糧秣事情は極度に劣悪で、連日スイート料理？といった有様、おまけに支那軍による使役作業に連日駆り出される重労働のため栄養失調に陥り、ビタミン不足で“鳥目”のため野戦病院に放り込まれました。しかしここでも、休養は許されず、昼間は目が見えるのだからと病院特有の使役に駆り立てられる始末でした。

この上海郊外の野戦病院——とは名ばかりの急造の病院——に運び込まれた多くの召集兵、中年の老兵の最後をみとるにつけ、そしてまたその人たちの実社会にあっての地位、名声を知るにつけ、戦争のもたらす残忍さ、悲しさ、不合理さに打ちひしがれる思いの毎日でした。

かくして、21年5月、入隊以来18ヶ月間肩ののしかかっていた“万年初年兵の悲哀”から抜け出し、ガリガリに痩せた亡者の姿でようやく帰国できた次第です。帰国当時の体重は38キロ、現在85歳で68キロであります。

◇◇◇ 7 & 8月 ハッピーバースデー ◇◇◇

誕生日を迎えた方々

文責・稲田興会員



左より7月11日生まれの 滝川・西村会員
右より8月12日生まれの上田・阪東会員

7・8月に誕生日を迎えた会員は5名(内1名は休会中)で、4人の方々からコメントをいただきました。今回は、奇しくも同日誕生者二組でした。当クラブより贈られる祝い品は、昨年度の“夫婦箸”に代わり、“酒器一客”

がそれぞれに手渡された。

- ・滝川道子会員(7月11日)「江戸しぐさ」講演活動に頑張っております。そのための勉強に日々追われる毎日。目の前の一つ一つを丁寧に暮らしていきたいと思っております。
- ・西村政見会員(7月11日)山登りや家庭菜園に明け暮れております。好奇心を絶えず忘れず色々挑戦したいものです。
- ・阪東照子会員(8月12日)八十年前は三つの可愛い童女でした。今は老女の憎まれっ子で〜す。
- ・上田清会員(8月12日)今後とも目標の達成に向けて頑張りたいと思います。



祝い品の「酒器」

◇◇◇ グルメサークル ◇◇◇

UBRIACO (ウブリアーコ)

増山敏夫会員

7月21日(水)、長い梅雨が明け気温も急上昇、外は炎暑。汗を流して熱い鰻も良いが、涼しいレストランでのイタリアンランチは格別である。久々の開催で16名もの参加。場所は桜ヶ丘駅前、岡野会員設計の神谷ビル2階。[UBRIACO]は桜ヶ丘肉の老舗・神谷の息子さんがオーナーシェフ(茶髪)、味も評判のお店である。いつものことながら、滝川サークル長の狙いはランチタイムが終わる頃、ほとんど借り切りの状態でのランチにある。今回もお店に感謝？され、我等も気兼ねなく楽しい会食ができるという訳だ。

まずビールで乾杯。コースメニューは前菜3種盛り、グリーンサラダで始まり(15分遅刻の私はここから参加、優しいサークル長さんは、私のために前菜、サラダを残して

置いてくれました)、ローズマリー風味のトマトソースパスタ、(ここでデキャンターの赤ワインがテーブルに)帆立子柱とタアサイのアンチョビ風味パスタ、白身魚の香草パン粉焼きバルサミコソース、(デキャンターの白ワインも)地鶏の腿肉炙り焼き、最後にシャーベットとコーヒー。

店内はほとんど我々が占拠？お味は勿論、料理の間合いも良く話しも弾み、楽しい一時でした。地元桜ヶ丘も捨てた物

じゃありません。良い店がありますね。

これでお代はお一人3,300円、これも魅力でした。

<グルメを楽しんだ会員>



多摩村の成り立ち

蓮池守一会員

明治4年の太政官布告(廃藩置県)により多摩は神奈川県第八区9番組(和田は7番)となり、その後明治22年の町村制施行により和田も加わり多摩村が成立しました。

この時から村議会が開かれるようになり、初代村長に富澤政資が、村議は各集落からの代表者が選出されたようです。

その後明治26年東京府の水源確保のため、多摩3郡が東京府に編入し、以降東京府南多摩郡多摩村となりました。(昭和18年都政)

明治13年頃が多摩村の人口は約2,820人、戸数は約540戸(町誌による)で、農業従事者がほとんどで、他に小売商・大工・傘屋等々の職商人が各集落に1~2軒点在し、自営共存の平和でのどかな村でしたが、次第に時代の変化の波も及んできました。その因をなすものに

- ・明治9年頃から向岡学校をはじめ4校開設
- ・同14年明治天皇兎狩行幸、御猟場指定
- ・同22年甲武鉄道八王子新宿間開通
- ・同41年横浜線開通
- ・大正14年玉南電鉄開通(八王子~府中間)
- ・昭和5年聖蹟記念館開設、対鷗荘移築
- ・同12年関戸橋開通
- ・同14年川崎街道開通(連光寺地域旧道)

道路・鉄道関係の整備が進められ、他地域との繋がりが広がり、特に桜と共に名所となった記念館は都内小学校の遠足地となり、駅から田んぼ道に列をなす風景が見られました。

戦時色の高まる中で

明治初期の多摩地区の自由民権運動については前回記しましたが、明治6年徴兵令、明治27年日清戦争・同37年日露戦争等への出兵、稲城市にできた弾薬工場をはじめ、その他の軍需関連工場が近隣地にでき、それへの徴用により農業から離れる人も出てきました。



対鷗荘

加えて第1次世界大戦(大正3年)以降世界恐慌や米価暴落による経済不況の波も押し寄せて来ましたが、多摩の農家では丘陵地の特性を活用して薪炭や目籠作り、養蚕、養鶏、養豚などの副業も盛んとなり、比較的平穏に生活を維持向上させていました。

大きく変化しはじめたのは第2次世界大戦末期、戦火を逃れた疎開者を迎えたことや、品川区の山中小4・5年生が吉祥院・大福寺・高蔵院に学童疎開を迎えたことなどからです。

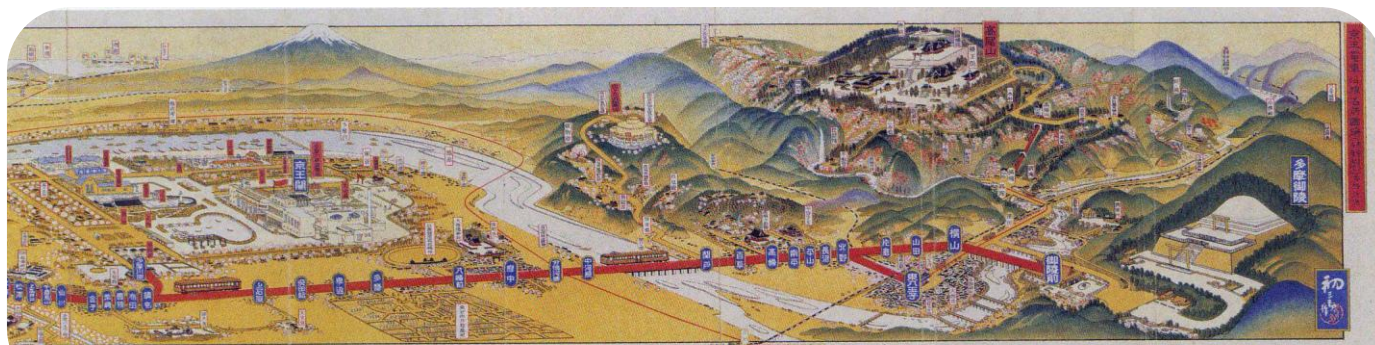
自然界と調和の中で

多摩市の農村から住宅都市へと大きく変貌したのは戦後の昭和30年以降といえます。

まず、昭和35年京王電鉄による桜ヶ丘開発で39年に町制(人口12,900人)、続いて同46年ニュータウンへの入居で市制(人口約32,000人)となり、その他の住宅や商工事業所等の誘致で人口約14万2千人の都市へと発展したことです。

多摩の歴史を4回にわたり概括してきましたが、そこに住む人々が土地や地形・自然を生かし働きかけ生きてきたこと、平穏に生きるためには共存共栄のための役割と責任を果たす暮らしと知恵を働かしてきたことを深く感じ取ることができました。

農村から住宅都市へと大きく変貌したこれからの多摩市での生き方も先人に学び、ますます自然界との調和、年齢を超えてそこに住む人との調和のなかで生きることの必要性和大切さを先人から学んだことを結びとします。



京王電車沿線名所図絵(1930年)

ザトペックを慕ってプラハを走る

山田喜一会員

5月9日朝8時30分、プラハの旧市街地広場に繋がる路地でスタートを静かに待つ。今長い間の夢だった私の敬愛するランナーのエミール・ザトペックの祖国の地を走ることが現実となった。

選手が待機する路地は、石畳の結構狭い道で、両側には中世の街並がそびえている。天気は晴れ、気温は思ったより高い。周りは身の丈もひと回り大きい欧州各国から集まってきたランナーに囲まれ、巨人国に迷い込んだガリバーの心境。スタート15分前ごろからレースの案内らしきアナウンスが始まるが、何を言っているのか皆目わからない。そしてスタート2分前ごろから会場のいたる所に設置されているスピーカーから、チェコの誇る世界的音楽家スメタナ「わが祖国」の“モルダウ”が流れ、プラハマラソンならではの雰囲気だ。



プラハの石畳を走る山田会員（中央）

コースは市街地を中心にモルダウ川に沿って上流方向、下流方向に行ったり来たり。プラハの市街地自体はそんなに広くないので、ワンウエイで42.195kmのコースどりをするととんでもない街はずれまで行ってしまうのではないと思う。途中、折り返しで逆方向のランナーとすれ違う場所が4箇所ほどあり、モルダウ川に架かる橋を5回渡った。街の中心部あたりの路面は石畳で、とにかく走りにくかった。2年前までは有名なカレル橋もコースに入っていたが、現在、カレル橋は一部修復工事中で狭くなっており、コースから外されていて残念だった。

レースは18kmぐらいまでは、5分の後半ペースでTさんと追いつき追い越され走ったが、20km過ぎに急に息苦しくなり立ち止まってしまった。じつは、プラハに来て風邪をひき、このため第1日目のコース下見やゼッケン引き換え、2日目に予定していたボヘミア古城見学にも



プラハ城からのプラハの街並み

参加せず、ホテルで休息をとり今日のレースに備えたのだが如何ともし難い。給水ポイントでしっかりと水を取り中間地点まで歩くと、息苦しさも治まったので再びゆっくりと走り出す。

沿道にはほとんど日本の方はいないようだったが、日の丸のゼッケンを背中に付けていたので地元の方たちはそれを見て「ヤーパン」と応援してくれたのが嬉しかった。30km過ぎ名古屋出身の青年が声をかけてくれ、35km地点まで一緒に走ってくれた。彼は仕事でワルシャワに駐在していて、昨年まではプラハに住んでいたとのこと。

プラハ中央駅に通じる鉄道の高架下が40kmポイント、時計は4時間40分を経過している。石畳を「走る」というより「歩き」の状態、何とか5時間と気持ち奮い立たせゴールを目指す。

旧市街地広場のゴール周辺は人垣でいっぱい、ゴールでは若い女性が、ランナーの国の旗を持って迎えてくれる。日の丸の旗がひととき大きく振られるなか、ヨタヨタしながらフィニッシュした。金色に輝く完走メダルを首にかけてもらい、場外に出ると、すでに走り終わった人たちがビールで乾杯している光景に、国は違ってもランナーの思いは変わらないものだと、遠く諏訪南公園の反省会に思いを馳せる。

タイムはザトペックには申し訳ないが、これまでで最も悪かった。

しかしその分、古都プラハの魅力を存分に味わうことができた。



カレル橋



ダリのリトグラフ

中村昭夫会員

今やシュールレアリズム（超現実派）画家の代名詞と言われるサルバドール・ダリ（スペイン生まれ 1904～1989）。「柔」と「硬」といった相反する要素を一つの作品内で表現する「ダブルイメージ」など自らを「偏執狂的批判的方法」と称し、写實的描法を用いながら多重イメージなどを駆使して、夢のような超現実的世界を卓越した技術で見事に描き切った画家です。後年の作品は宗教的な色彩を帯びたものに傾倒していくが、最後までその芸術に対する姿勢は真摯であり純粋であり続けました。

20代の頃パリに行きピカソやエリュアール、ブルトンなどの面識を得、特に詩人エリュアール夫人であったガラと恋に落ち駆け落ちして結婚。ガラはダリにとって生涯ミューズであり支配者でありマネージャーでした。1982年にガラが死ぬと「自分の舵を失った」と激しく落胆して引きこもってしまいました。ダリは写真で見られる通りなかなかの美男子で、上向きにピンとはねたカイゼル髭と目を大きく見開いた顔はアートそのものと認知されるほどの人気です。口髭の形の維持は水あめで固めていたとのこと。



サルバドール・ダリ

私は海外駐在員として1969年から4年間米国ニューヨークに滞在しました。その間、多くの一流の音楽や美術に接する機会を得ることができました。美術については最初の頃はあまり関心がなかったのですが、家内に同伴して美

術館めぐりや画廊めぐりをしていくうちに少しずつ美術に関心を持つようになりました。

70年10月頃、カーネギーホール近くの画廊でダリのリトグラフを見つけました。何枚かのダリの作品があるなかで購入した絵の構図の素晴らしさに、心を奪われてしまいました。値段は840ドル（302千円、当時360円/\$）、当時の私の日本での給料



ダリのリトグラフ（サイズ 800×1100 ㍻）

は5万円位でした。値段に躊躇していたら家内から「そんなに気に入ったのなら買ったら」と背中を押され、清水の舞台から飛び降りた思いで買ってしまった次第。この絵は、私の人生の中で購入したたった一枚の美術品で、まさにこの絵とは運命的な出会いでした。

この絵は上部と下部の構図に分かれており、上部は十字架に架かっているイエス・キリストを上から見た構図でイエスの顔から四方に閃光が発せられ、その脇にミレーの晩鐘の農夫が祈りをしている姿が描かれています。下部には羽根の下部を人間の足のように強調した蛾が仁王立ちしており、ドンキホーテと思われる小さな人物がダリの故郷カダゲスの山々に向かって行く構図となっています。

◇◇◇東京多摩プロバスソング◇◇◇

作詞 池田 寛

作曲 中村 昭夫

聖の桜仰ぎつつ 多摩の流れに身を清めて
緑の杜に囲まれた 我が故郷の行く末と
社会奉仕に力をそそぐ
集う我等プロバスクラブ
プロバス プロバス 多摩プロバスクラブ

霊峰富士を仰ぎつつ 心の業を磨き合い
豊かな知識身につけて 次の世代の若人の
教え導く糧となる
集う我等プロバスクラブ
プロバス プロバス 多摩プロバスクラブ



編集後記



今期から、ベテランの登坂副委員長を加えた新メンバー構成でプロバスニュースの編集を進めていきます。

○蓮池守一会員による“多摩の歴史散歩”は今32号で4回の連載を終了します。この連載のおかげで、古代から近代に至る多摩のたたずまいを身近に引き寄せることができ、多摩に対して新しい感慨を抱くようになりました。

○“ザトベックを慕ってプラハを走る”の山田喜一会員は、全日本の高齢者マラソン界にあって五指に入る実力者で、75歳の高齢でありながらその広い行動力には感服します。

○“私の一品”では、中村昭夫会員にお願いし、40年間愛蔵された“ダリのリトグラフ”とその格調高い説明をいただき、同会員の芸術的見識の高さに感心しました。

（平田 記）